

周南市文化芸術振興プラン策定委員会（第２回）会議録

1. 日時	令和６年８月２８日（水）１４時００分～１６時００分
2. 場所	周南市役所２階 共用会議室G
3. 出席者	委員：大橋委員、尾上委員、門井委員、小林委員、 高菅委員、西崎委員、原田委員、松本委員 事務局：文化振興課：川上課長、花野課長補佐、清水係長、 山本係長 傍聴者：なし
4. 議事	周南市文化芸術振興プラン策定について
5. その他	周南市の文化振興について

１．開会

２．協議事項

（１）第１回委員会の意見の確認について

（２）第２回論点に関する意見交換について

３．閉会

（１）第１回委員会の意見の確認について

（事務局）

別添資料１「委員会（第１回）の主なご意見」、資料２「周南市文化芸術振興プランの概要」、資料３「周南市文化芸術振興プラン 参考資料」を基に説明。

（会長）

事務局からの説明に対して、何かご不明な点や質問があれば挙手をお願いします。

（委員）

（質問なし）

(2) 第2回論点に関する意見交換について

論点1 子どもの文化芸術体験活動

(会長)

論点1の子どもの文化芸術体験活動についてお願いします。高菅委員に口火を切っていただきたいがいかがでしょうか。

(委員)

まず、小さい子どもと考えると、難しいゲームにするよりは、ただ単純に手を使って折り紙をおったり、絵画に貼ったりという、工程が簡単なものが小さい子どもにはとっつきやすいのではないかなと思って、文化芸術という事で何か作品を作れたら良いかなと思い、意見を書き添えました。

(会長)

難しいことをするというよりも、体験しやすいものからしたらどうかというご意見です。その他にもご意見を書いておられる方がいらっしゃいますが、この意見に重ねていただいても良いですし、別の視点から述べていただいても構いませんけれども、委員の皆さまいかがでしょうか。

(委員)

イベント的なものをするのも大事だが、折り紙とか子どもの居場所になるような何でも出来るようなところが、市内のいろんなところにあるということが、とても大事な事じゃないかと思っています。家でゲームばかりしている子ども達が少しでも外に出て、色々な活動を簡単にできるという所が保証されるという事はすごく大事じゃないかなと思っています。

(会長)

イメージされているのは公民館とかの場所ですか。

(委員)

そうですね、子どもが入りやすい施設とか。

(会長)

児童館とかと連携をしていく。私も学童をしておりますが、学童で泥んこ遊びを極めてみたいです。この前は本気のかき氷屋さんが来たりとか、子ども達は本物に触れるという体験をすると、純粋に受け取ってくれるので、子ども達はいろ

んな居場所を用意して、その文化芸術活動が寄り添うことができると、群馬の話なのですが、文協の皆さんが学童に来てくれて、フルート吹いてくれたりとか、身近なところで触れられると、とても良いのかなと思います。

他の委員の皆さんいかがでしょうか。山本委員が面白い事を書かれていたのですが、美術博物館のバックヤードツアー、学芸員のお仕事体験など、引き続き取り組んでいただけると良いと感じます。とお書きいただいております。

松本委員いかがでしょうか。

(委員)

美術博物館では平成十何年からバックヤードツアーというのを、親子対象でやっているのですが、人気の高い講座なんです、これは美術博物館というと展示を観る所、展覧会を観るところというイメージが強いので、そうではなくて、本来の役割としては、資料や作品を保存して後世に伝えるという大事な使命があるので、そういうものをお伝えするという事で、取り組んでいる事業なので、こういう風に言っていただけると有り難いのかなと思います。

(会長)

聞いてみたいのですが、いろんなコーナーがありますが、子ども達が喜ぶコーナーってどんなところですか。

(委員)

今なかなか難しいなと感じているのは、来年が開館して30年になるのですが、開館準備の時からいるので、およそ30年間動向を感じていると、昔より学校で利用されるのも減ってきましたし、子ども達だけで観にくるというのも格段に減っていますし、大きな絵本展を今やっていますが、そういう展覧会をした時には親子で来られたりしますが、なかなか常設だけを観に来ることは少なくなっていると思います。そういう危機感を感じるので、書かせていただいたのは、地域というかふるさと発見のような、せつかく周南市に生まれ育ったのであれば、周南ってこういう街だなと感じる、こういう人達がいたんだと感じることができる、美術博物館はそういう場所でありたいなと思っているのですが、なかなかそこが届いていないという事を最近とても思います。

(会長)

常設に来てもらうのはどこの美術館さんも苦勞されていると思いますが、別にスペースは美術博物館に余裕があったりするのですか。

(委員)

余裕はないです。

(会長)

伝統芸能を観たりする場所は、美術博物館にはどうですか。それは文化会館みたいなのところになるのですね。

(委員)

そうですね。

(会長)

もう一人、二人ぐらいできればと思うのですが。

(委員)

確かに子どもの文化芸術体験はとても大事で、子どもの時代に文化芸術に触れるとその後の将来に大きな影響を与える。今、市民センターが色んな取り組みをやっておられて、陶芸教室を菊川で陶芸連盟の人がやった際にはすぐに一杯になって、定員を超えるくらい。夏休みの企画で夏休みの宿題の観点いうところが1つには、あると思います。それが人気なので、今度は横浜でやられたりとか。いろんな分野での取り組みは夏休みを中心にやられているが、日常的にどうかという所に問題がある。日常的に文化に触れるスタイルが根付いていない。日本の社会では。だから、それが根付いて、ふらっと美術館に行って常設観たり、お茶飲んで帰られるという、ちょっとしたゆとり。そういうスタイルを持つことが増えるといいなと思っている。それで文化芸術の感性が育っていくので、それが難しいのではないかと思う。文化会館の方でも小学校、中学校と音楽祭をやって、幼稚園で年長でまど・みちおの歌を三曲歌って舞台体験をする。これはとってもいい。中学生になったら、芸術体験で本格的な劇団四季を観たりとか、全国的にもそういった取り組みをされている所は少ないと思う。それはとってもいい。それを繋げて、将来大人になっても、そういう経験を活かした人生を送れるといいなと思っている。それが関わった御父兄は知っていても、その他一般には知られて

いけない。文化を伝える難しさはそこにあって、伝わっていくと良い。あれがいいよ。面白いよ。すると出かけてみようかと思う。そういうムードをどうして作るというか、そういう運動が必要なんだという気がしますね。日常をみると。

(会長)

文化芸術振興に関しては、日常生活をどういう風に変えていくか、劇的に変えることは難しくても、次の論点は情報発信の在り方で、今ある素材を生かすことが必要。人気の陶芸教室が市民センターでやられていることが知られている。それがごく一部の人だけじゃなくて、多くの興味がなかった人たちの目に触れる、目にすることができるという状況を作れたら、また違ってくるのかなと思います。そのために、次の論点である情報発信というのは重要になってくる。子ども達に関しては部活動改革という他の論点でも関わる場所がありますので、そちらで再び話が出来ればと思います。

論点 2 文化芸術に関する情報発信

(会長)

どなたか口火を切っていただいてよろしいですか。

(委員)

仕事でも企業支援とか創業支援とか、お店を始める人の支援をやっているが、今そういった方たちも情報発信は大事で、今回の文化芸術に関しても、どういうテーマに関しても情報発信が大事だと思っている。いろいろ見させてもらっていろいろな種類の情報発信のツールがあったり、お金がかかるものから、かからないものまで幅広くあるところが世の中の一般的じゃないかと思うが、文化芸術の中でも、まずターゲット、子ども向けにするのか、高齢者向けにするのか、全般的な世代に向けたものにするのか、ターゲットをちゃんと決めた上で、どういったツールを使ってやれば良いのかというのを、分析する必要があると思っています。テレビ局の方とやりとりする中で、テレビ局に広告を出すのはすごくお金がかかるのですが、テレビで流れた影響力は地元の企業さんに話を聞く中で、効果があったと。効果というのは良い効果と悪い効果があり、例えば、お店がオープンした情報が流れて、お客さんがたくさん来て、オペレーションがまだでき

てなくて、逆に文句を言われたという悪い点もあるのですが、そういうのは除いたとしても、テレビの影響力は大きいと、個人的には思っていますし、テレビ局もSNSから情報収集していると聞いていますし、予算のかけどころによっては、テレビは大事なのかなと思っています。

(会長)

今回挙げていただいた皆さんの意見が多かったのが、ターゲット層の設定です。どこにどういう風な情報を発信するか、先ほどの論点の、子どもたちであれば、子どもたちにどう発信するのか。この後の指導員育成のところでいうと、子どもたちではなくて親世代、上の世代にどう発信していくのか重要になってくる。お聞きしていてテレビの影響力はまだ大きいんだなと。私は昭和の人間なので、テレビの影響力は大きいんですが、学生たちにとっても大きいのかなと思いますながら、お聞きしていました。

門井委員のCCSの定期番組作成放送とは、これはどのようなご意見ですか。

(委員)

よく考えて書いたわけではなく、私はCCSが好きなので、よく観ていますが、やっぱり一年なり、何年なりの帯の番組が良いなと思う。単発で今日何々がありました。賑わってますというのは、あまりパツとしないなと。帯番組のイメージでそういうものを制作していただけたらと。今色々書かれているように、何を？どこにスポットを当てる？などはまだ考えていないのですが、番組ができるのであれば、帯が良いなと。後ろの方にも少し的外れな事を書いたのですが、周南市そのものが非常にいい街で、街のいいところが活用されているが、よそからみたらよくできた街、形的にも、企業も、良くできた街というのをもっと活用出来たらなと、それがCCSのこともそうなんですが、徳山の新幹線の着く駅が発信の場所としてはこれほど良いところはないなという気がして、CCSと書いたのは、それも含めて、今盛んに、ブラウン管に画像も流されていますし、それを定期的にといいか、ずっと帯でやってもらったらいいなと。中身については実際考えているわけではないんですが。という意味です。帯番組にしてもらったら良いなと。

(会長)

帯番組というフレーズが出たので、大橋委員いかがですか。

(委員)

C C Sで帯番組を制作しております。昨年の4月からC C Sで周南の「これ知っちゃる？」私の企画、私のディレクションで創っている。これはC C Sから依頼があつて創っている。周南市の文化歴史をおもしろおかしく紹介するという番組をやっている。第一回が徳山動物園はなぜ出来たかというテーマでやって、そんなことを月二回続けております。観たことある人はいないとか。

(委員)

観てますよ。

(委員)

もう一つ実は「インクルしようよ！」福祉番組を三年に渡って創り続けています。これもC C Sの帯でやらせていただいたのですが、やっぱり、そういうものの文化芸術版というか、そういうことをコミュニティの放送でやり続けることは大事だと思うし、それが実際に今やっている人間としては、十分可能ではないかと思う。もちろん、製作費とかお金がかかることではありますが、できますし、僕は街中を歩いていても、声をかけられるし、「これ知っちゃる？」は声しか出てないのに、声だけでも分かるといわれる。それはやはり、効果があるのかなとは思ふ。ケーブルテレビとかコミュニティのものを、ラジオを含めて、周南市にはコミュニティFMもあるので、新周南さんもそうですが、ローカルメディアの活用、使い勝手がいいし、大手メディアは取り上げてくれないところもあるので、周南地域はローカルのメディアで新聞、ラジオ、テレビ、があるのは珍しいと思う。ローカルのメディアを最大限に生かしていくのは大事な事ではないかと思いました。

(会長)

私の専門でいうと、メディア自体が文化なので、新周南、C C Sも含めて、どういう風に周南の事を伝えていくかということ自体を発展、発信していくことが重要な事だと思う。

ターゲットの話で横のつながりが大事なんじゃないかと思う。どこに発信して

いくかにしても、やみくもにしてもいけないので、情報の集約であったり、一元化をするのが重要なんじゃないかと西崎委員がお書きになっていますが。

(委員)

みんなそれぞれ頑張っておられて、地域の豊かさというか、メディアもそうですね、経済界もそう、文化の活動自体もそう。施設もあれだけの文化会館、美術博物館を持っている。新幹線も停まる。潜在的な良さがある。ただ、外の方は気が付いているけど、この街ですっと暮らしている人は、時には何もないと失礼な事を言う。いろんなことがある中で、文化振興財団は「かるちゃあ花畠」文化協会も年二回「文協しゅうなん」を出して、日刊新周南も事細かに取材していただいて、大橋さんも活躍して、C C Sも色んなメディアとして取り上げてくださって、関係者は当然見てよく知っている。これが広がらないというのは、文化の持っている要素が潜在的にあって、どう広げていくかというのは、見せ方も大事だと思う。新聞の出し方とか、C C Sの「これ知っちゃる？」とか、気を引くような企画、意図を、分かりやすく伝えるのが大事で、ただやっていることだけを伝えても伝わらない、広がらない。工夫が必要。もうちょっと頑張って繋げて、一体的な活用をしていくと、こんなことをこんなにやっているんだと、この街の相対的なものも見えてくるし、豊かさも見えてくるし、それが分野分野では分かっているが、相対的に見えるところにっていない。地方に評論家がないので、評論できる人がちゃんと評論してくれると、この辺のすばらしさが、第三者に客観的な価値観を持って伝わる。当事者である文化協会の私が美術館の事を言っても手前味噌になるので説得力が弱い。第三者が伝えてくれて、美術博物館はすごいねと。いつかの新周南やC C Sがすばらしい企画をやっている、なかなか広がっていかない。内容はいいのに伝わらない。広げ方、伝え方の工夫が求められている。素材は十分にある。どういう風に生かしていくか、一工夫、二工夫が必要。こういってお互いが顔を合わせることで、いろんな人が出会い、融合させる情報の出し方がこれからのヒントかなという気がします。

(会長)

私自身もこの点は重要かなと思っていて、長めに時間を取らせていただきました。もちろん完全に決まったわけではないが、我々が集まっていること自体が、

横のつながり、まず情報の共有がされたうえで、どういう風に情報を発信をしていくか、ターゲットはどうか、手段はどうか、そのためには調査をして、誰にどういうことをしたらその情報が届くのかという事を精査して、やみくもにするのではなくて、どういう情報をどういう風に届けていくか。これはいろいろな部分の論点に関わってくると思うのですが、今回は考えて出来ましたというわけにはいかないが、時代は変化をしているので、もしかしたら、プラン実行期間中に変わっていくかもしれない。そういった変化に対応できるような情報発信を常に考えていかないと、最初に西崎委員にご指摘いただいた日常は変わっていかないと思います。

論点3 文化芸術団体への支援

(会長)

松本委員から口火を切っていただいてもいいですか。

(委員)

これは美術館にいて感じることに言いますか、今美術館では、一般の方のグループに貸し出しをしているが、そういう団体さんも高齢化で若い方が入ってこられない中で、今までだったら、美術館は3メートル壁面があるので、そこに作品を掛けて、照明を当てようとすると、結構な労力がいらいます。そういうのが、若いうちは出来ていたけれども、年取ったから自分たちじゃ大変なんだよね。出来づらいんだよね、という話を展示の作業中に聞いたりすることも最近は多くなってきました。

シルバー人材センターさんをお願いして、二人ぐらい来ていただいて展示を手伝ってもらうとか、今までにはなかったような状況になっているなと思います。

やっぱり、普段こういう活動をするのは、ただ絵を描いている、物を作っているだけではなくて、みなさんにも観ていただこうと、そういう事も含めて活動なんですけれども、そういうところが高齢化や若い世代が団体に入っていないという事で、やりづらくなってきているんだという事を文化を振興していかないといけないが、そういう実情はあるというところで、じゃあこの方たちがそういう活動を長く続けていけるのか、どういう支援が必要なのかということも含めて、考

えていかないといけないと思ったので、このように書かせていただきました。どういふ支援が必要かは団体さんごとに違ふかもしれないですが、皆さん困らているのは高齢化で今までは出来ていたことが、出来なくなっていて、発表の場を持つのが難しいとか、今回で最後にしようと思うという団体さんもいたりするので、結局それは芸術文化の活動が衰退していく流れが少しあるのと、これから人口も減少していくということもあるので、どの時期がピークかわからないけれど、少しづつ下り坂にあるイメージなのが、現場にいる自分が感じていることです。

(会長)

展示にまで苦勞されていることを知って衝撃は受けましたが、近隣に二校の高校がありますが、連携されてきたことはありますか。

(委員)

基本的には大人の方で活動されていて、団体さんによっては、高校生と一緒にという方はいらっしゃると思うが、美術館でされている方は大人だけでという感じで。どちらかという若い方がいらっしゃらなくて、70代とか60代後半の団体さんが多いというイメージです。

(会長)

今回の論点3は皆さんに事前に挙げていただいた内容だと、まず課題を把握すると良いだろう。先ほどの情報と一緒に、まず課題を把握する、ターゲットを把握するのと一緒に、課題を把握して、解決策をどういふ風に出していくか。水準が色々あるよね、大中小あるよねというところで、皆さんお書きいただいているところが多いのではないかと思います。松本委員の発言に足すような形でもよいですし、違ふ角度から今回の支援に対する課題をご指摘いただいても構わないですが。委員のみなさんいかがでしょうか。

(委員)

私は文化協会、文化活動の総まとめの組織ですが、周南市が誕生した時に文化協会の会員は3,000人くらいいたが、2,300人最初はずいぶん頑張って会員数を増やしたり、入っていない団体に声をかけたりして、何とか3、4年現状維持。辞めていく人が100人いたら、100人足して現状維持ですから、そのまま放って

おいたら下り坂になって、数年前からどうしようもなくなって、2,000人を割って、今では1,500人。合併した時からちょうど半分に減っている。それは高齢化が進んでいる顕著な現象なんです、70歳代と80歳代が中心です。若干60歳代と50歳代は微々たるもの。暮らし方が変わったり、働き方が変わってきたことが大きく影響してきているところがある。そうは言ってもなんとか続けていくためには、現状を把握して手を打っていかないと、高齢化は進むばかりで、実は一つ一つの団体は課題があり、次世代が育っていかないといけないが、指導者はずっと元気な間は教え続けて倒れたら無くなるという組織は多い。これは本当は望ましくない。次に繋いでいく活動、上を引っ張っていく人は、そういう視点で考えていかないと、自分が出来る間はやっていって、できなくなったら終わりということでは、次に繋がっていかない。そういった視点をもった団体の育成とか、そこで行政の支援も関わっていかないと難しい。その辺の体制をどうするかということと、活動が時代とともに変わってくるんだと思う。女性もほとんど働いて社会が成り立っている。それが当たり前として受け止めて、そうした中でどういう活動が可能かという。これまでは高度経済成長の終身雇用の中でやってきて、企業も応援してくれているところでの活動だから維持できた。今では全く世界が変わっている。同じスタイルでは維持できない。今の時代に合う形での活動の在り方や支援の在り方が変わって来ざるを得ないのではないかな。その時代に対応できていない。今の現状では無理ですね。

(会長)

ありがとうございます。皆さんの話をお聞きしていると、活動するため支援がまず必要、活動を継続させていく支援というのが別方向から必要なのかなと。そのためにも、まずはどういう支援が必要なのか、現状把握、何が問題なのか、大中小ヒアリングをして、適切な支援体制を準備するのが重要なのかなと思います。

論点4 文化観光

(会長)

原田委員から口火を切っていただいてもよろしいですか。

(委員)

この前の推しの話もありましたけれど、聖地のようなものを目指すような何か、まど・みちおもそうですが、運営していくといいなと思っています。そのための企業との連携ができるといいのかなと思ってここに書かせていただきました。

(会長)

私もつい先日境港市の水木しげる記念館に行ってきました、水木しげる記念館にも感銘を受けたんですが、何よりも街の人達がスタンプを置く場所を自分たちが出して、準備をして、メンテナンスをして、商店街全体が妖怪の道を作るんだという意気込みでやられていたのが、すばらしいなと。鬼太郎というコンテンツがあるのが大前提であるのですが、そういう点でいうと周南市は駅から文化会館まで歩いてもそれを感じるところがなく、知る人ぞ知る児玉源太郎となってしまう。そうすると大橋委員の提案が生きてくるのかと思います。

大橋委員いかがでしょうか。

(委員)

ここには、仲小路廉のことを書いていますが、ご存知ですか。大正時代の今の農林水産大臣で横浜に生まれた人で、大正時代の米騒動を収めた人で、今令和の米騒動が起きているので、それに関連して次のC C Sで流すために取材したんですが、仲小路廉が今いたらどうしただろう。仲小路廉の家のは石碑が1つあるだけで、古びた周南市教育委員会の看板が1つあるだけなんです、そこにQRコードを入れるとか、ピッとやったら情報が出るとか、あったら良いのではと思ったのと、さっきの話を聞いて思い出したのが、少し前にまど・みちおさんのPH通りのぞうさんの噴水を取材しても、水が出ないんですよ。詰まった。昔取材した時は平成三年頃、新周南にいたころ音楽も鳴ってた。今は鳴りもしない、汚くて。僕らで掃除して磨いて取材したんですよ。そういうことだなと思いました。だから、まど・みちおさんが生まれた辻町の辺りとか、文化会館から美術博物館にかけて何か出来ないのかなと思ったり、林忠彦さんもまど・みちおさんもコンテンツとしては有名だけど、さっきの鬼太郎ロードじゃないけど、まど・み

ちおさんならそれに値するくらいの価値はあると思うが、それが現実なんだなと思いました。落ち葉に埋もれて、音の鳴らないぞうさん噴水はどうにかならないのかと。そういうことをどうするのかを会議で今後も含めて、コンテンツ作りという意味で、何かの取り組み、既存の記念碑だったり、石碑だったりをもう一回見てもらうのもそうでしょうし、目を向けてもらう取り組みを絶対にするべきではないかなと、自分が取材して思ったことです。

(会長)

高菅委員いかがでしょうか。周南市でこれは関心を持ってもらえるコンテンツと思われるものは何でしょう。

(委員)

児玉源太郎です。実際観光案内で来られて、駅近くで一時間くらいで、歴史的なものを観られる所はありますかと聞かれると、児玉源太郎をご案内しますし、お時間ある方は回天をご案内するので、そういったことをPRできたらいいなと思っています。

(会長)

先ほど大橋委員からあったんですが、街全体に文化芸術がそれとなくあるということは重要だと思っていて、鬼太郎ロードもそうですが、全国的に道に何かを設置する取り組みが進んでいて、まどさんに関してはもう少し何か出来ることがあるのではないかと。まどさんが絵を描かれるということは、あまり知られてないので、それを発信していく、それが、身近に街にあれば、ぞうさん噴水の状態をみるとメンテナンスをするということに、問題点はある気はしますが、街に文化芸術を分かりやすくするのは一つの手立てなのかなと思う。児玉源太郎の生家があたりとか、旧児玉邸、今は民家になっていますが、そういう所にリンクさせるようなパンフレットであったり、QRコードを読み込んで、指示が出て歩けるような状態にすることも必要だと思う。一点、文化観光で心配しているのが、この前、テレビでバズッたら問題が起こったのもそうなんですが、児玉源太郎とまどさんがとてもうまくいきました、バズりましたというときに、何が起こるか団体客を吸収できる能力がどれだけあるのか。観光バスなど。この前の記憶に新しいking & princeのきららの花火がありますが、そこもセットになっ

てくると思うので、何でもかんでもバズらせればよいというわけではなく、どういう風に身近に周南市民の皆さんに文化芸術振興させながら、県外の人達に興味をもってもらえるかが文化観光のプランでは重要になってくるのかなと思っております。

論点5 部活動改革

(会長)

実体験をされているというか、一番熱く書かれている山本委員がお休みで残念ではあるが、現場という事で原田委員からお願いします。

(委員)

部活の地域移行を進める中で、スポーツ関係は声をいただくので、やる気のある方、若い方がおられるんですが、文化面はそういう声が挙がらないのが現状です。ある程度行政主導で体制を作っていかないと、ニーズに応じた対応は出来ないと思っています。

(会長)

文化面の指導者はなかなか手が挙がらないかなとは思いますが、それで、下にある高菅委員の山口市の「コロガルあそびのひゃっかてん」とはどのような取り組みなんでしょうか。

(委員)

ワイカムさんがやられていて、入場無料で商業施設の中で行きやすい。子どもとなると美術館という固いイメージがあるが、商業施設は親と行く場所で、しかも入場無料だと親もうれしい点だと思うので、そこでイベントもできたらと思うのと。話は変わりますが、自分が太華中の出身で中学校の時に職場体験があって、美博さんに行った思い出があるんですが、今も学校の職場体験というのは継続されておられますか。

(委員)

直接の職場体験はないですが、CCSさんに職場体験に来た中学生が、美術館に取材しに来るみたいな、間接的に美術館を知ってもらうことは去年ありました。直接的なのは中学生はなかなか。

(委員)

なくなったということですか。

(委員)

お任せをできることがなかなかなくて、そうですね。

(会長)

職場体験があっても、美術品などは触れてはいけないのもあるので、なかなか難しいのかなと思います。商業施設は面白いかなと、ゆめタウンとか協力が必須にはなってくるが、古民家でカフェなど古い家に触れながら、文化体験をしてみると面白い試みの一つになるのかなと思います。

大橋委員にも現場にいらっしゃる方としてお話いただきたい。

(委員)

何か子どもたちのコンテンツというか、才能を掘り起こしていくという事は、映画だったり、映像だったり、サブカル、Y o u T u b e やティックトックを含めて、そういったものはビビッドなんだなと思いました。そういう取り組みを、例えば周南公立大学でも原田一紀先生とか長澤監督もそうですし、なかはらかぜ先生とかそういうことを指導できる方が周南公立大学にもいらっしゃるので、芸人で言えば、山口ふく太郎、ふく子とか周南市在住の吉本興業の芸人さんもいらっしゃるので、地域人材を生かした、周南、下松、光を含めた横断的な部活移行も含めた、今の子どもたちの興味ある分野の部活の文化芸術の受け皿づくりをやっていかなければいけないのかなと。

(会長)

尾上委員が指導者報酬について書いておられますが、いかに教える人材を育成するかが重要になってくると思うのですが、大橋委員みたいな人を増やすのは可能ですかね。一番いいのは大橋委員みたいなひとが量産されることですが、世の中にそんなにいらっしゃるものかと、教育に興味を持たれるクリエイターの皆さんとがどれ位いらっしゃるのが私は分からないのですが。育てて何とかなるのか。それとも外部から呼べるのか。

(委員)

いるような気がしませんか。

(委員)

経験が必要でしょうね。その方が実際持っている素材というか、経験があった上でそういう視点を持って取り組んでいただける。

高下先生が美術教員であって、周南公立大学に関わってもらって、今は岐陽中も何かやろうとしているから、岐陽中と周南公立大学と文化協会と三者が話し合いをしながら取り組みを、実験をやっていこうと。高下先生がなぜ良いかという、美術教員として中学の現場を経験していらっしゃる。美術の実践、自らもアーティストである。文化協会の美術連盟の会長で統括も出来る。そういう人を置いたときに、初めて物事が動いていく。大橋委員も映画やメディアの経験を持ちながら、映画への情熱で教育にアプローチ、そういったところで今動いていっているから。

(委員)

音楽とか演劇とか、マンガだったら中原かぜ先生とかいるし、恐らく既存の教育団体や先生のOBとかの今の文化活動を周南市でやっていらっしゃる方に機会があればやってみたいという人は絶対いると思いますよ。教えられる人の情報がないですね。私できますという人はなかなかいないと思うので、私なんかは分かりやすく日本史の教員になっているので、日本史のサークルを指導したりしますが、世の中の皆さんは普通に働かれてるけれども以前実はやってた。分かっていないところもあるのかなと。情報発信というのを本来の論点にはしますが、情報収集というのを公的な団体が持つのは重要かなと。そのためには異業種というか異なる団体が集まって情報を定期的に交換とするのが必要なのかなと感じました。

論点6 大学生の文化芸術分野での活躍

(会長)

これは周南公立大学に重なっていますので、私の方から口火を切らせていただくと、周南公立大学の長澤先生は経済経営学部に移転されましたが、原田先生、

中原かぜ先生は特任教授として今後もご退職が迫っていることになりますが、うちの大学の専門家という点では少なくなってくる。大学生の意識がかなり高く、私のゼミでも来月から来年度の前期募集が始まるが、文化芸術振興に関して街づくりで何かできないか。うちのゼミは、例えば双六を作ってみたり、タオルを作ってみたりとか形のあるものをつくることを必ずテーマにしている。学生たちに街づくりを実体感させるために、問題点を理解させた上で、何があると街づくりにコミット出来るのだろうか考えさせながらしていきたいと思っています。その上で高菅委員はうちの学生たちと一緒に仕事をしていただいた事もあったと思いますが、書かれていることも含めて何かありますか。

(委員)

前回お話した京都グラフィでは、スタッフとして参加した学生はインターンシップ制度として単位を付与するよという取り組みをされていて、単位で釣るというわけではないのですが、そういったことも含めて、若い世代が文化芸術にとつきやすい、取組やすい、入りやすい制度を設けられたらいいのではないかと思います。

(会長)

単位は一番釣れますね。大橋委員がいていた地域ゼミの一環として映画祭があるのですが、そこで知り合った学生たちと広がっていったりしますか。多分、彼ら、彼女たちも単位が欲しいから来ていると。

(委員)

僕は前身の徳山大学出身ですが、この地域に残った理由は、1・2年生の時に教養ゼミの鼓ヶ浦整肢学園の草取りを一年間やったことが大きくて、そこで衝撃を受けた。そこで障害を持つ子とふれあいを持った。それでこの地域にこのまゐてもいいかなと思ったのがきっかけ。それと徳山大学の時に美術部で絵を描いていたが、パレットの社長に部費の10万円を渡して、これでうちの大学の美術部を助けてくださいと、一年間スクールに通わせてくれて、石丸先生に教えてもらって、美術展に毎年うちの部から作品を出していた。それが大きかった。やっぱり大学生の地域の支援というか、パレットの社長はいまだに忘れられませんが、学生と地域の関わりがあればこそ、僕がここに残ってこんなことをしているのも、徳山大学に

入ったことが大きかった。徳山大学と地域の連携が当時できていた。後で聞いたら、パレットの社長が徳山大学の学生がそんなことをいってきたら、応援しないわけにはいかないでしょという話で。そういう街ぐるみの大学を応援するという事が大事なのかと思う。

(会長)

今、幸いにしてボランティアの依頼を頂く。目的が明確でボランティアだけというのは、学生数の管理があって、私のゼミ生はレノファのパブリックビューイングに参加をしているが、サッカーチームを応援したり、街づくりに貢献したりして、明確なので、ずっと支えたいと参加している。そういう人達はある。文化芸術分野でも単なるボランティアでなくて地域ゼミで参加することもあるが、ゼミには二人絵が描ける子がいて、その子に商品のイラストを描いてもらって、やっぱり私は絵が描けますという子がいるんですよね。そういった子たちが街中出ればいいと思います。それにはまず、うちのゼミですが、それ以外にも街に出ていますし、まちなか共創センターというのが、駅前図書館の三階にありますので、そういった拠点を活かしながら、情報共有というか、文化芸術振興に関しても寄与できればなと思っております。ただ、私が倒れたら途絶えるようなプランはあまりよくないので、サステイナブルなプランを模索していく事が重要かなと思っています。

論点 7 戦争遺跡（人間魚雷「回天」の歴史）から学ぶ

(会長)

戦争遺跡と児玉源太郎、まど・みちおなどの人物とは違う内容になるかなと思います。回天の歴史からどのように学びを進めていくのかという、これも私は歴史の専門家として口火を切らせていただきますが、いかに情報を捉えるか、ご遺族の方の意向もありますので、もちろんですが、おもしろおかしくすることはできない。かと言っておどろおどろしく描くと情報がリーチしないということで、いかに情報を出していくかと。私が常に思っているのは駅前に文化芸術の情報が全くない。何か駅に情報が出せるものがあるといいのかなと。駅じゃなくても駅に隣接する場所で良い。文化芸術をアピールする場所、QRコード、看板、CCSをどう生かすかいつも頭を悩ませているが、そういうところを活かしながら、あそこはインフ

オメーションスペースという場所なので、あんまり活かせてないよねという話をされていたので、情報をどう出していくかが重要になってくる。そのためには大津島に行く前に情報が収集する場所があると良いかなと思う。

周南市の歴史を展示されている美術博物館が重要かなと思って、松本委員からご意見をいただければと思います。

(委員)

現在でも回天記念館親子教室を開催されていて、ずっと開催されているので、そういうものを軸にそれが大人対象だったりできればいいなと思う。アンケートを取っていればなぜ参加しようと思ったか知りたい。夏休みに市内の小学校の先生が10年研修で美術博物館に初めて来られて、なぜ最近美術館に子どもを連れて来ないのか、学校では難しいのか、という話の中で、今は市内の生徒数のチラシを学校にお配りして、皆さんに一枚ずつ届くようにチラシを配っているが、それを持って帰って来るかどうかは保護者の考え方次第と先生は言われた。理解のある保護者はほっておいても連れて行って下さるし、子どもが行きたいと言っても、そういうことに関心のない親であれば、受け流して終わってしまう。そんな話があって、そういうことなのかと思った。参加しようと思った方は意識を持った方で、戦争の事を知りたいとか、地元の歴史を知りたいとか、回天ってよく聞くけど何だろうとか、そういうところがあって参加されたと思うが、船で行って一日かかるところにわざわざ行って、何で参加しようと思ったのか聞くと、こういう風に発信すると皆さんが興味を持って、関心を持ってくださるのがわかるのではないかな。美術博物館には全国から作家さんが来られるが、ほとんどの作家さんが回天に興味を示されます。それだけのものだと思うが、時間があつたら行きたい、一日かかるから行けないが。大抵の作家さんとか、よそから来られた方は、ぜひ見てみたいとおっしゃられるので、関心はすごく高い。どういったものなのか。知りたい。観てみたいと思われる方はすごく多いので、その辺を、駅のところで見られるようにするとか、そういうところが必要なのかなと思う。うちの美術博物館は徳山市時代に来ていて、徳山の歴史ということで、古代から現代までという形で観ていただくようになっている。回天は記念館があるので触れてなくて、徳山の空襲の事で終わっているのですが、そういう意味では回天記念館は特化した施設なので、それを観て

いただくというのと、ここにそういうものがあつた意味を知っていただいたり、情報が得やすいようなものを作ることが必要なのかと思う。

(会長)

個人的には美術博物館にも回天の記述が欲しいと思いましたが、今の話で別の論点の所で尾上委員が書かれていましたが、経済格差、教育格差が最近問題になっていて、興味がないから行かない、興味があるから行く、イベントを開催すると興味がある人しか行かない。日常にどう受け入れてもらうか、見てくれれば教育格差は減ってくる傾向にある、日常なので。それをどういう風にできるか重要なのかなと思う。

論点 8 文化芸術団体と企業等の連携

(会長)

西崎委員から口火をきっていただいてよろしいですか。

(委員)

経済的な支援というのは欠かせないわけで、文化芸術に携わる人たちからもアプローチしていく、文化振興財団が商工会議所のメンバーに入っていって、全国でも稀で、文化部会に入らせてもらって、人との関係が出来ていく。経済人と文化に関わっている人たちの出会いの場になっている。パーティーがあれば出かけて行き、顔がお互い知り合える、やっていることが伝わっていく。ロータリーとかの例会は全て受けました。経済誌に理解してもらうためには有効な場なのです。毎回例会に呼んでもらって関わっていこうと思って、それが 1 つのきっかけ作りでの場で、現状を知ってもらう。文化とは何ぞや、意義を知ってもらう、そこで初めて実態が分かって支援していこう、こういうことなら応援していこうと企業を訪ねても支援してくれない、志が分かって心が動いて応援しようと思うので、その辺の関係は日常の付き合い方から生まれてくるから、何か必要になったから訪ねて行って、出してくれるのは稀ですね。そういう事で行ったら経済と文化は、他の分野でもそうだが、普段に関係をいかに作っていくかは大事だと思う。商工会議所は経済の拠点で、お付き合いしていったら、お互いが支えあう関係を作ります。非常に大事だが、現実には難しい。お金をもらう事だから。

(会長)

一つの考え方として企業との連携と書かせていただいたのは、支援をしていただく関係があると思うのですが、今後、企業単位でも文化芸術を担う主体に成り得るのではないかと思います。会社の名前を関してなくても、企業さんには、興味を持った人がいるよね、我々より情報を持っているはずなので、御神輿でもそうじゃないですか、どれだけ興味を持ってもらえるか。レノファパブリックビューイングも会社の枠を超えてレノファを応援するという、もちろん社を上げてやっている訳ではなくて、会社の中でレノファを好きな人はこういう人がいるよと、情報共有してもらって、お手伝いしていただくという事がありますので、金銭的な支援を含めた、人員的な支援じゃないですが、今後、文化芸術団体を支えてくれる人材が出てきてくれないか。

(委員)

企業は儲けないと会社を続けていく事が出来なくて、その努力をされている一方で、地域貢献という事をどの会社さんもやられている。夏休みの神輿が出たり、スポーツの実業団を抱えているのはそういう意味合いが強いのかなと思うので、それであれば、文化芸術団体を支援する企業があってもおかしい話ではない。企業も、スポーツがどうしても目につきやすいというのがあって、どういう文化芸術団体があるか、普段接点がないような気がするので、先ほど西崎さんが言われていたように、接点を増やしていく機会を増やすべきなのかなと思う。

K R Yのある番組がスポンサーを探していて、マラソンの関係の番組なのですが、市内の会社でマラソンをやっている社長や役員はぱっと思いつく。そこには営業に行った方がよいと思い、見事スポンサーを勝ち取られたが、各会社の社長さんとか上の人が良いのですが、音楽が好きとか、文化芸術のこれが好きだという社長さんがいらっしゃると思うので、金銭的な支援はそういう社長さんから営業をかけていったほうが、理解は得られやすい気がするので、西崎さんの言われるように、接点を深めていくうえで、分かっていくので、僕は仕事柄そういう事をインプットしているので、文化芸術団体として、データの蓄積、この企業はこういうことに関心があるというのがあれば、支援が取り付けやすいのかなと思いました。回天みたいな、誰もが知っているものに関しては、比較的理解が得られやすいのかなと

思うのですが、文化芸術の中のさらに突っ込んだものの支援となると、どこまで企業の皆さんが理解してくれるかは疑問です。支援を求める内容にもよると思います。

(会長)

そういった中で支援が固定化されている周南地域企業メセナ協議会は、周南にはないのですか。

(委員)

ないですね。

企業メセナという考え方が地域の企業にあるかという、企業メセナとは大きな会社が絵画を買ったり、そういう所から出ているのかもしれないが、一社が何かというのももちろんだが、一つの地域の中の企業が集まって芸術文化を支援していくためのメセナへの取り組みを協同的にやっていくような企業を作っていないと、尾上さんが言われた通り、社長さんが映画好きと聞いて、映画祭の協賛に行ったりしているのですが、そこは限界があって、今までは出していたけど、今年は勘弁してほしいという事があったりして、そこを考えると、これだけの文化施設もあるから、周南の主だった企業の中で企業による文化芸術支援をするという、大きな企業メセナを共同的な何かを、協議会みたいなものを作っていないとしんどいのかなと。協議会で毎年補助団体を決めていくとか、文化協会と連携して、構成団体をそういう風にしていくとか仕組みを作って、そういうところの音頭を市内の代表的な企業にお願いしてやってもらうとか、どこも地域貢献とか文化芸術への興味とか、やらなければいけない空気があるので、考えていくべきなのかなと思う。

(会長)

お話を聞いていると、今の周南市の実態は個人の力量に任されている感じで、おそらくプロフェッショナルな、その範疇を超えると途切れてしまう。おそらくメセナに関しては色んな視点を持った人たちが一か所に集まるわけではなく、そこが関わり合いを持つことで、新しい気付きや新しい分野での発見が得られるのかなと。そういうところに企業と文化芸術団体との接点を見出すための活動が出てくるのかなと思いました。現状では各部署のプロフェッショナルの知り合いに頼

って、景気が悪くなると途端に途切れてしまったりする。いくつかの手段を複層的に用意するという、重層性があると企業との連携もスムーズにいくのかなと思いました。

論点 9 指導者、伝達者、教育者、芸術家等の人材育成

(会長)

「やまぐち部活動改革応援バンク」について説明をお願いします。

(委員)

4月から地元の陸上クラブの監督をしていて、勉強中です。前任が80代だったので、暑い中立たせておけないと引き受けざるを得なかった。自分が指導者になるとなったときに、僕は箱根駅伝を走った経験しかなくて、体育学部でもなかったし、勉強していたわけではなかった、調べていく中で、スポ少のスタートコーチという、スポ少の理念を学ぶ資格を取らないといけなくて、そのスポ少に資格を持っている人が二人いないと活動できない。それを今年一年かけて取るのです。今は前任の方が持っているので、名前を貸してもらっている状態なのですが、それを調べていく中で、そもそも陸上を指導している人はどれくらいいるのか、調べていて検索をかけていたら、「やまぐち部活動改革応援バンク」が出てきて、スポーツだけでなく文化系の指導者もデータ登録されているようなサイトなのですが、出来たばかりなのか、全然登録されていなくて、今からなのかなというところです。指導者がいないとなったときに、要請が必要ですが、今いる指導者がどういう人かわかるものがないと、声掛けをするにしても、子どもが習いたいにしても分からないと思ったので、既存の応援バンクを活用するのか、周南市内での文化芸術における指導者のリスト化が必要じゃないかと思った。スポーツの場合は誰でも教えられるのではなくて、資格を取らないといけないという事があったので、一番最初に書いているのですが、経験していたら誰でも教えられるのか、いいのかどうか分からないのですが、文化芸術の立場でも理念とかあるか分からないのですが、そういうのを勉強する機会を設けて、最低限それを受けたら指導できるよという形の方が、スポーツの方と同じで、文化芸術であってもいいのかなと。高校の先生などの教員の資格を持っていたら違うのかもしれないのですが、人材育成のやり方もですし、指

導している人のリストは何らかの形で作った方がいいのではないかと思います。

(会長)

実際それが決まったのは声がかかったのですか。

(委員)

子どもがスポ少に行っていたので。

(会長)

親がリクルートされたのですね。

(委員)

私は教員免許を持っていて、いずれやりたいなと思っていたが、結局教員にはならずこういう道だった。定年を超えてからで良いかなと思っていた。土日が大会でなくなる、好きだからよいが、指導者もボランティアでやっていて、大会費用も会から出ないので、実費で行っている。お金をくださいと言うわけではないが、全員かボランティアでやるかといえば、そうではないので、別の項目の所で指導者への報酬と書いているが、指導者の人材育成にもお金がかかるし、育成し終わってもお金がかかるというのがあって、ボランティアでやる人がどれだけいるか、率直に思う。

(会長)

個人的には土日を取られてボランティアは・・・。

(委員)

子どもが同じ大会に出るからよいが、子どもが大きくなって、よそ様のお子さんを指導するようになれば、考え方が変わるのか、陸上が好きだからそのまま指導していきたいのか、まだ分からない。今は土日がつぶれても、自分の子どもが出ているので、そのままでいいのですが、誰でもそういう事にはならない。

(委員)

私も同じような感じで、映画が好きだから映画を教えろと言う感じだったので、一年目はボランティアだった。一年目をやって、二年目に本格的に部活になるとなったときに、その校長先生が、ボランティアでは限界があるから、限界でしょ？と言われ、はい、と答えたら、それは教育委員会にできた制度があるので、文部科学省に4、5年前にできた部活動支援員という、教育委員会に登録する、下

松市教育委員会に三人しかいないそうですが、周南市教育委員会はどうか分かりませんが、制度を使って時給が出るようにするから、だったら出来るよね、じゃあやります、ということでやっている。指導者に対する受け皿、ちゃんとお金が出る、時給が高いか安いかは別問題ですが、ある程度報酬についてはきちんと考えなければやってられないというか、尾上委員の話を聞いて共感しました。

(会長)

法の抜け穴を責めるしかなくて、有償ボランティアというグレーな。そういった枠組みを利用していかないと、無報酬は続いていかないと思う。報酬が出る以上は責任が出てきますので、今回も論点として挙げられている、指導者、伝達者、教育者、芸術家を一緒に育てるシステムはない。それができれば理想ではあるが、現状では制度という所で、責任を持ってもらうために報酬をどうするか。受益者負担。そうすると教育格差、経済格差が出てきてしまうので、経済的に困窮している人もできるようなシステム作りが出来ると良い。そのためには、法的な団体が補助金を付ける。補助金を付けるためには、ちゃんとしたシステムが出来てきて、よくわからない団体にお金を付けないようなシステム作りが重要になってくるのかなと思う。問題が複雑に絡み合ってきて、そのためには事務処理をしてくださる地域の皆さんが必要になっていて、現状ではお父さんお母さんのやりがい搾取になってはいないかと、つながっていくのかと。とは言え、今回の論点 9 として挙げた中では、ちゃんとしたシステム作り、報酬作り、ボランティアでやるにしても限界があるので、今後部活動を引き受けるにしても、システム作りを考えていかないと、市としても続いていかないと感じております。

論点 10 文化イベント

(会長)

門井委員の話からいこうかと思うのですが、いかがでしょうか。

(委員)

最初に触れたことと重複するのですが、文化だけではなく、周南市をみてと思ったときに、いろいろな当たり前のものなのですが、色々なものが備わっている街だとその中で文化という事なんです、そうするとまとまった街の中にいろいろな

ものがあって、おおざっぱに言うとなると完全に企業城下町、企業に属した人がかなりの割合でいるという中で、どういう風に巻き込むか、一緒に組み立てていけばいいのがあるかと思いますが、ぜひ、こういう時には一緒に考えてもらえる形になればよいなと思いました。駅が新しくなり、先ほどから出ていますし、イベントが出来るところを作っているという事なので、人口が多くなろうが、少なくなろうが、駅中心の街だと思いますし、駅中心に発信ができる、イベントができるしくみができたらいいなと思います。大津島のことも出ましたが、フェリーもありますし、大分まで発信すればよいという意味で書きました。

(会長)

高菅委員、周南市といえば、これはどのようなイメージですか。

(委員)

周南市といえば工場夜景であったり、動物園が街中にあったり、魅力的なところかなと思っていて、周南市といえばをテーマにイベントが実施できたり、一年中イベントを何かしらできていたら、周南市に行けば文化芸術に触れられるのだという認知度を、県内外、市内外に広げていければいいなという思いです。

(会長)

今回ご意見の多くにあった中で、いろんな素材はあるんだ、一年中文化芸術に触れられるポテンシャルはあるのだろうと感じます。若干気がかりなのは、今話をしている段階だと、鹿野、熊毛、夜市が落ちてしまっている中で、どうしたら周南全域で文化芸術振興ができるのかなと。知り合いに鹿野の住人が多いので、鹿野は鹿野で、熊毛は熊毛で頑張っていっちゃって、それが点々としてしまっている中で、どういう風に周南市としてやっていくのか、周南市といえば、何だと言われると、この前、学生と一緒に駅前のシンボルを探しに行って、三年寝太郎を飾っている駅もありましたが、周南市はないですね。新幹線口にフグがいて、県外の学生からすると、フグは下関ではないのですか。という質問に、実は徳山もと説明しなくてはいけない。周南市の文化芸術振興においても、周南市とはなにかを、一つでなくてもよいと思うが、明確にフレーズ化されれば、それこそ、もえサミや絆映画祭もやっていて、そういうことをやっている市は多くない。じゃあ何か、欠けている。フレーズでもいいし、シンボルでもあると。この前の打ち合わせで周南市はゆ

るキャラいませんよね。五番煎じくらいになってしまうので、作れとは言いませんが、いると分かりやすいんですよね。この前、出雲大社行ってきましたけど、出雲って触れちゃいけないようで、しまねっこと言って、ゆるキャラがいましたが。とてもいじっている。そういう風に古いものを活かしていく。周南市はもう少しあると思う。文化イベントに関しても、二人しか意見がなかったが、もうすでに行われているものが多い中で、どういう風に発信をしていくか、市内向けに、市外向けに、周南市といえどという事を少し大切にしたい方だと思います。

論点 10 点で話をしてきました。

私の雑駁な推理ではあるのですが、今回大きなテーマでもあった、文化芸術振興をいかに日常に溶け込ませるか。そのうえで、情報をどういうふうに出していくか、人にどういう風にアクセスしていくか、情報と人を文化芸術振興に活かしていくかが大きなテーマになっているのではないかと思います。その他に松本委員が書かれている文化芸術振興プラン第三章、具体的な現状の把握、問題点の洗い出し、これも今回の会議の中のテーマになってくるのではないかと。課題もいろいろあって、展示品を飾るのに、シルバー人材センターを活用しました、これも課題だと思う。これが出来なかったら展示できないわけなので、その一方で、団体を存続させていくための課題、情報の課題であったり、人材育成の課題であったり、これもどういうふうに洗い出しをして、どういうふうに解決していくか、全部解決策を提示できればよいが、課題も分かっていない中で、どういう風に収集、整理していくのか、収集するための組織作りというか、市役所の役割が大きくなってこざるをえないのかなと思う。

その他というところで、自由に皆さまの意見を伺いたい。

(委員)

この街はいろいろな魅力を抱えて、街としては豊か、だから危機感がない。だからこれに焦点を当ててやっていくというものが生まれてこない。そして、街が豊かだったから、住人自身が育たないということが一方ではあった。自らがやらなくても行政に言えば何でもやってくれる。行政がお金ないとなると住民が動かざるを得ない。街づくりで住民が動くことで街が育っていくというか。ただ今は状況が変わってきている。住民がやるべきことを住民自らがやっていくことが大事。いろ

んなテーマがあって、「まど・みちお」にしても「回天」にしても、それを活かす手立てが必要。それだけではなく、この街には多くの魅力がある。その中である程度焦点を絞りながら、その絞ったものについて、それをうまく見せる方法、伝える方法をどうするか皆さんの知恵で出していけば、この街もおのずと道が見えてくる。でもそこが難しい。

(委員)

この街って魅力が多い。コンテンツが多い。コンテンツが多すぎる。それぞれの魅力のある、先ほど、鹿野も熊毛の話がでたが、八代のツルもそうだし、鹿野の水路を作った岩崎想左衛門もそうだし、まど・みちお、林忠彦、私たちがやっている映画もそうですし、コンテンツが多すぎてしまって、それぞれ一生懸命取り組んでいる人はかつていた、今もいる。でもその人たちが高齢化していった、それを継いでいる人、継ごうとしている人がいない。僕自身も、絆映画祭を一生懸命やっているが、なかなかコンテンツが多すぎるから、協賛金もなかなか集まらないから毎年赤字が出ている。その赤字は実行委員で自腹を切っている。そうしないと続かない。そうしないと続かないからみんなで自腹を切っている。だけど、自腹を切れる人間って、あと数年が限界だと思っていて、じゃあ僕たちが自腹を切れなくなったらこの映画祭は終わってしまう。終わらせないために毎年、血眼になって協賛金を集めている。映画祭を1回やるのに、200万くらいかかる。補助金0でやっている。今までも補助金申請をしたけど、通ったことは1度しかない。それが現状。おそらく他の団体もそうではないかと思う。同じような状況の中で、周南市内のいろいろな団体が、自分の好きなコンテンツを一生懸命にやって、それぞれ限界を抱えて、後継者がいない中やっている。これを何とかするための全体の意識の強化と連携と発信って、すべて今議論していることに関わっていかないと、それぞれのコンテンツが全部共倒れになるのではないかと、という危機感はなんとなく今日の会議を通して感じたこと。魅力あるコンテンツがたくさんあるのに、それをやる人間が孤独に頑張って、全部共倒れしていくことが一番怖いというのが2時間の会議で感じたこと。

(会長)

指導者もそうだし、団体もそうだし、手弁当でやっていく限界ですよ。自腹を

切れるだけの熱量がある人がそこら中にいっぱいいればいいですけど、そういつたときに企業さんに支えていただく、大きな団体からの補助金があると続けやすい。そのために審査基準を設けたりするということも、文化振興にとっては必要なのかなと思う。

(委員)

組織の強化と仕組みの構築ということなんだろうと思う。

(会長)

だからこそ、情報が集まらない。我々自身、コンテンツの整理が出来ているか。

整理できていないからこそ、おそらく発信もできなくて、発信もできないから観光案内することもできない。文化芸術という中での我々のコンテンツ整理をして、どういう風に発信していくかが重要になってくる。

(委員)

周南市といえばで、昔からそうだが、お土産の話がよくでていて、周南市のお土産ってこれってない。商工会議所でも一時期作ろうとして、いろいろ集まってもらったが、結局普通のクッキーのパッケージが工場夜景だった。観光コンベンションでも販売していただいたと思うが。周南市はたくさんあってこれっていうのがない。ありすぎてない。観光の街というわけでもないし、観光に行くところはあるが。周南は出張の街よねって言われている。出張の街だったらお土産はあったほうがいいよねってなる。が、今もお土産はできていない現実はある。

恵まれすぎていて困っていないからこそ、そこを考える必要がない。ということで今までできているように思う。恵まれすぎていて、方向性が決まらないというのはあるかなと思う。

(委員)

毎年絆映画祭に来てくださった、監督や俳優さんにお土産を持たせるのに困ることがある。周南映画祭に来られたスタッフさんにお土産をあげたときに、生田斗真さんが周南工場夜景のビスケットを気に入って、追加注文があった。有名人が気に入ったというのが言えるかどうか分からないが、そういうのが大事。

でも、確かににお土産に困る。何を持たせたらいいのか。

(委員)

お土産が作れないというのもコンテンツが多すぎるというのに関連してくる。
まど・みちおクッキーを作ったら、児玉源太郎饅頭はないのかという話になる。

(委員)

アーティストが宣伝すると影響力はすごいが、続かない。一過性のもの。

(委員)

話題に挙げていただいたクッキーも作っているのは熊本。県外っていうので、
「？」と思うお客さんもいる。熊本の工場も機会の不具合で製造中止になった。
今ある在庫で終了。

著名人の発信力というので、先日オリンピックの選手が、アンパンマンミュージアムと知覧に行きたいと言っていた。入館者数がどれだけ増えたか追えていないが、そういった発信力は大事だと思う。

(委員)

出口のない海の公開の翌年の回天記念館の入館者数は倍増した。

(会長)

お土産は確かに学生も言っていて、周南乃風っていうクッキーが作れないかなとずっと思っていて、湘南乃風にのっかって。もじったものでもいいのかなと。

今日はありがとうございました。問題点がクリアになったのかなというのと、頭の痛い問題が見つかってしまったという感じかなと思う。

以上をもちまして本日の会議を終了します。

3 閉会